
4色の欠片

希和 近江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

4色の欠片

【Nコード】

N7122I

【作者名】

希和 近江

【あらすじ】

『また、何年後かに会おう。』
大学最後の年の冬に、この言葉と共に『饞別の言葉』を残して消えた唯一の親友。

問題のある家業、問題のある仲間、問題のある俺自身。中心にいる自分自身ではそうは思わないが、周りの一般人から見たら問題だらけらしい俺。

1年後、そんな俺は唯一の親友が残した言葉に従って探しモノを始める。

親友に再会して、渡し忘れたモノを渡すために。

ハジマリ

「君を見ていると飽きないし面白いからだよ。」
新年を向かえ、明日から学校が再開されると言う日に突然呼び出しのメールが来た。大学近くにある行きつけのカフェに来た俺を、向かいに座る呼び出した本人が観察するように見てくるから何だと尋ねたら、俺にとって唯一の友人であるその男はそう答えた。

飽きない？面白い？感情が顔に出ない俺なんかを見ていて？

そう考えてから思い出した。この男と何でつるんでいるのか。いや、何故この男が俺と普通の友達付き合いが出来るのか。

俺は生まれてからこの20年間、冗談でもなく顔の表情が変わった覚えがない。感情の変化によって、わずかに眉間に皺がよる事や口角が上る事はあるが、親しい者以外はその違いを見分ける事が出来ない。小中高の卒業アルバムのどれを見ても、その時が俺にとって楽しくるうが何だろうが、俺の顔は感情の出ていない無表情。家に有る家族写真も全て同じだ。その無表情から俺の感情を正確に理解できたのは、血の繋がった身内と実家に居候している大勢の『同居人』の中でも古くから居るごく一部のみ。

俺の無表情はどうも不機嫌な怖い顔に見えるらしく、せつかく出来た友人は怖がってしまい次第に離れていくし、街を歩いていたらその道の奴らに喧嘩を売られるのは日常茶飯事。ついには実家に居候している奴らの内、新しく入ってまだ俺の感情を読み取れるほど慣れてはいない若い奴らにまで恐れられる始末。そして、実家に大勢の居候がいる原因でもある家の職業も合わさって更に人は近づくかなくなつた。だからと言って、家業にもそんな事で離れていった友人達にも不満はない。何故なら・・・

「お前から見て、今の俺はどういう感情に見える？」

「そうだな、無表情のしかめつつらの後に、無表情の自嘲の笑みを浮かべたから、何ともやり切れない感じになってるんじゃない？」

「・・・ああ、そんな感じだ。」

というふうに、この友人には何故か俺の感情が分かっってしまう。そんな奴が身内以外に一人でもいれば、こんな欠陥人間でも一般人と同じように生きていけるようだ。家業の関係で、『一般人』の前に『ある程度』と言う一言が付くとしても、だが。

ただ一度、つるむようになってすぐの頃、あまりにも的確に、それまで唯一俺の感情を理解していた身内以上に俺の感情を当てる事を不思議に思つて、何故分かるのかと聞いた事がある。その時この友人は・・・

『僕の家は代々占いを生業にしてる家系でね、僕自身占いが得意なんだ。占い師には、相手の内面を的確に読む力も必要で、どうやら僕はその力がずば抜けて良いらしい。』

そう答えた。当時はこの発言の意味を理解出来なかったが、今なら出来る気がする。

この友人の占いは、俺が知っている限り外れた事がない。それに私生活でも教師の内面を言い当て、その教師のなけなしのプライドをずたずたにしてしまい、罰として大量の課題を出される事も度々あった。何故かその課題の半分以上を、俺は毎回手伝わされたが。

「今度は何を思い出していらついでるのさ？」

「・・・いったいいつまで俺はお前の課題を手伝わなければいけないのか、と思つてな。」

「なるほど。」

そう短く返して、友人は温くなった紅茶を一口啜る。しかし、その声音、態度、行動、その他俺に感じ取れる全ての事から、友人がいつもの飄々とした感じとは違い、何か抱え込んでいるように思えた。

「何かあったのか？」

「・・・やっぱり分かっちゃったか。そうだな・・・ああえ

て言うのなら最低1年間は、君に僕の課題を手伝ってもらう事はなくなりそうだよ。」

「あ?」

珍しく間抜けな声を出してしまった俺に、友人は悪戯が成功したような顔で微笑する。だがそんな事よりも、意味が分からない。確かに、この友人は普段から持って回った言い方をするが、回りくどい事が嫌いな俺という時や占いに関係する時はこんな話し方は絶対にしなかった。

「そんな無表情でしかめつつらなんてしないでよ。僕も、こんな持って回った言い方なんて本当はしたくないんだから。」

気持ちを切り替えるかのように、また一口紅茶を啜り、俺もつられるように冷めてしまったコーヒーを飲む。

「俺は、回りくどいのは嫌いだ。」

「ハイハイ、元々無表情なのに、わざわざ意識してまでさらに無表情になって睨まなくても分かってるよ。」

「時間は待ってくれないんだから、さっさと話せ。」

「あー、うん・・・分かってる・・・そのお・・・。」

どうも今日の友人は歯切れが悪すぎる。

「実は、1週間前にイギリスのばあ様から電話があつてさ。」

「イギリスって事は、おばさんのか。」

「そうそう、そのばあ様。」

この友人は、その彫の深い顔立ちや髪色、肌の白さや目の色を見ればすぐに分かるが、いろんな所の血を引いている。確か、母親がイギリス人とトルコ人のハーフで、父親が日本人とブラジル人のハーフだと言っていた。その結果、中東辺りで見られる彫の深い顔立ち、雪のように白い肌、たれた^{まなしり}毗に寶石のような蒼と翠のオッドアイ、銀に近い金系の髪なんていう物を持っているが、これで名前が日本風の名前でなければ、この男が日本人のクウォーターで日本国籍を持っているといった誰が信じるのだろうか。

「それで^{はるあま}晴明、そのイギリスにいる婆さんが何だつて?」

今頃になつて悪いが、この友人の名前は清明。名字も付けるとその名も安倍乃あべの 清明はるあき。下の名前の読みを変えれば、そのまま平安時代の有名人だ。まあ、俺も人の事を言える名前ではない。何故なら俺の名前が小野おの 篁こうだから。これも読み方を変えれば大昔の有名人だ。たまたまこんな名前の奴がそろつたが為に、つるむようになつた中学の時から二人そろつと『偉人コンビ』なんて言う、なんとも不本意な呼び名を付けられてしまった。清明は男でも見惚れるほど顔が良く、俺は顔つきが悪かつたため虐めとかはなかつたし、からかわれたりしてもお互い10倍返し出来る力も毒を吐ける口もあつたから、一週間ばかりかけてこの名を考えてくれた両親と大勢の『同居人』に文句を言うつもりはこれっぽっちもない。

「篁、回想にふけていている所悪いけど、話を続けるよ。その婆様が、新年早々不吉な夢を見たとかで占いをしたらしい。その結果、僕に最低1年間は日本を離れる、と言うお達しが来た。それで、僕は君がいない学校になんか行つても面白くもないし、そんな学校にも興味がない。だから、昨日の内に学校と教授に退学届けを出してきた。」

「・・・・・・は？」

急展開すぎてさらに意味が分からず、なんとも間抜けな声を再び出してしまった。清明の家は父方も母方も狙つたわけではないらしいが、どちらも古くから続く占い師の家系だ。だから、何か予感があつて占いをしたら不吉な結果が出たから学校を休む、なんて事は出会つた中学の頃からよくあつた。たとえ出席日数が足りなからうが何だろうが、テストの点さえ取れていたら良いと学校側が放置してしまう程よくあつた。今回も、おそらくそう言う事なんだろう。だが、何故そこで学校を退学する事になる。

「どうして休学じゃなくて退学なんだ。」

「だから、さつきも言ったように僕は君がいない学校になんて行くつもりはない。それに、君も僕も元々大学の卒業資格なんて今さら必要ないから、別に良いじゃない。」

まあ確かに、今行っている大学の卒業資格なんて全く必要としていない。俺も晴明も今行っている大学の留学制度で去年行ったアメリカの某有名大学にて、いつの間にか卒業資格と博士号なんて物を貰ってしまった。だから、留学から帰ってきた時点で今の学校を辞めても良かったんだが、俺の家の事情と言っより親父個人の事情から止められ、こいつもそれに付き合ってくれた。

「それはそうだが、俺にお前がいけない状態であの学校に行けと？」

「何？僕がいけないと寂しい？」

「全然。」

「そこは嘘でも寂しいって言おうさ。」

「俺が嘘でもそんな事言うと思うか？ただ、お前がいけないと教授から押し付けられる面倒事が増えるし、お前の取り巻き連中が五月蠅くなるなど、そう思ったただけだ。」

こいつには、中学の頃から顔の良さと外面の良さにつられて女だけでなく、男の中にもファンクラブと名乗るとても煩わしい取り巻きがいる。家業を知られていた中学高校の時は、面と向かって何も言われる事はなかった。しかし、あまり家業を知られていない今の大学では、昔からの知り合いだからって馴れ馴れしいとか何とか、『安倍乃 晴明の親友』というポストが欲しいと思っっている『友人未満』の取り巻きの男達がなんとも五月蠅い。

それに加えて最近、何故か俺達の所属ゼミの教授から後輩の指導やら試験問題の作成なんて言う仕事を言いつけられる。後輩の指導はともかく、試験問題の作成なんて学生の俺達の仕事じゃないだろうと思うが、教授が俺の親父と茶飲み友達なせいで断る事も出来ない。1度断ったら、その日の内に親父に話が伝わって、家業の仕事を寝る暇も無いほど増やされたから、そんな事になるよりは教授を手伝った方が良かった。

「あの教授、篋の事を気に入ってるからね。退学届け出した時も何か頼みたそうにしてたから、今日中にも連絡来るかもよ。」

「それなら、今日の朝メールが来てた。休み明けの学会にお供しろ、

だとよ。」

俺が今朝来た教授からの最悪なメールを言うと、清明はとても楽しそうに声を上げて笑う。あまりにもムカついたので、テーブルの下で脛を蹴ってやったら涙を浮かべながら謝ってきたがまだ肩が震えてやがる。

「……………」

「ゴメン、ゴメン。…………さて、もうそろそろ帰って荷物整理しないと。」

しばらく俺が無言で見続けると、コートを手にして清明が立ち上がったので、俺もコーヒーを飲み干して同じ様に立ち上がった。

「1年間日本にいない事も、退学した事も分かった。それで、イギリスの本家にも行くのか？」

「取り敢えずはね。」

「取り敢えず？」

「本家で婆様に詳しい事を聞かないと、どう危ないとか全然分らないから。前に言った事あるでしょ？占い師は自分や自分に近い者の事は占えないって。占えるのは他人だけ。婆様が今回僕の事を言ったのは、僕自身じゃなくて僕の周りの環境について占った事から知ったらしいし。つまり、最低1年って言われてるけど、場合によっては1年も経たない内に帰ってこれるかもね。」

つまりそれは、1年以上経っても戻ってこれないかもしれないという事。言葉の裏に隠されている現実を、俺は無意識に拾ってしまっている自分でも分からない暗い思考に捕らわれかける。それでも…………

「大丈夫。僕も、君も、変わる事はない。」

「……………そうか。」

何かに気付いた清明の言葉を聞いて、暗い思考の海から掬い上げられ暖かい気持ちになる。それを感じ取ったのか、清明は嬉しそうに笑った。

「それじゃあ、唐突だけど君に餞別の言葉をあげる。」

「餞別の、言葉？」

「そう、餞別の言葉。さつき君の事をずっと見てたのは、これを言うため。」

「・・・俺の事を占ってたのか。」

ふと気付いた。さっきのカフェで俺をじっと見ていたこいつの目が、いつもこいつが誰かを占う時の目付きと同じだと言う事を。こいつはどんな方法で占っても百発百中だが、その一端を担っているのが、この、どんな方法で占い結果を出したとしても、最終的には本人の顔を見て結果を判断すると言う所だ。清明は俺が知っている限り、その決まりを変えた事がない。

「That's light! 君を占うのは初めてだから、結構楽しかったよ。」

確かに俺は今までこいつに占ってもらった事はない。別にこいつの占いを疑ってたわけではなく、何となくこいつに占ってもらおうと俺達の関係が変わってしまいそうだったから。それ以上に占っている時のこいつを見ると、知人を占う事に苦しんでいるように感じたから。俺が何故俺の感情に気付くのかと聞いた時に、こいつも何故占ってほしいと言ってこないのかと聞かれたからそう答えたら、理由は言わなかったが何処か悲しそうだったが嬉しそうに笑っていた。その顔から何かあったんだろうと感じ取って、それ以降も俺はこいつに占いを頼む事はなかった。頼む必要も感じなかったしな。

「前に君が言っていたように、僕にとっけて知っている人間を占う事は苦痛だ。何故なら、僕ら占い師は結果を偽ってはいけない。それがどんなに悪い結果だろうと。つまり、見た相手に死の結果が見えたのなら、それをそのまま伝えなくちゃならない。まだその事を理解出来ていなかった小学生の時、君と初めて出会った中学の入学式の1月前、ちょうど小学校の卒業式当日にそんな事が実際に起きた。相手はそれまでの一番の親友で、それまで占いを頼まれた事は無かった。結果をそのまま伝えたら、その瞬間一方的に殴られて喧嘩別れ、そして1週間後には二度と会えなくなった。その時から、僕は知人を占う事に抵抗を感じ始めた。でも、今から言う事は自分から

進んで占つて見えた事じゃなくて、偶然見えた事。言おうかどうか迷つてただけど、さつき君の顔を見ながら占つたら、言わないと余計に悲惨な事になるって結果が出た。」

カフェを出てからずっとこっちを振り返らずに、一步前を歩いてきた晴明が急に立ち止まってゆっくりと振り返る。

「気が向いたらで良い。でも、出来ればこれから3年の内に探した方が良い。」

「何を？」

「君と同じ様に、感情の表現で問題を持っている4人。」

同じ高さにある晴明の顔は、いつも占い結果を言う時と同じ無表情。でも、その瞳にはいつもとは違い、有無を言わせない力強さがある。

「その4人は、喜怒哀楽のどれか1つしか表情に出せない。その1つ以外の感情の時には、君と同じような無表情が作り物の表情。ただ、その1つの感情に関してはとても敏感で、僕と同じ様に君の感情にも気付いてくれる。それに月日が経てば、君の全ての感情にも気付いてくれるようになる。その4人が、君に幸運をもたらしてくれる。どんな幸運でそれが何時なのかは分からないけれど、その時君がどんな危険に晒されているのかは分かる。でもごめんね、その危険については話せない。だけど、3年以内に探さないと君を中心に、周囲の人間を巻き込んでよくない事が起きる。特に哀しみの感情の子は時期に気を付けてあげて。時期を読み外せば、その子はいなくなる。」

「・・・分かった。」

俺が了承を示せば、晴明の表情は普段の柔らかい笑みに戻った。

「大丈夫、1人見つければ自然に皆集まるから。」

「ああ・・・これからまっすぐ帰るのか？」

「うん。本当は君の家に行っておじさんや大さん達だいさんに挨拶したかったけど、時間なさそうだからやめとく。それと、空港までの見送りなんかいらぬから、君とはここでお別れ。なんとなく、イギリス

行つて全貌が分かつたら音信不通になる気がするけど、空港まで見送られたら本当に今生の別れみたいで嫌だ。て事で、元気でね。組長就任の宴出れなくなつたけど、俺の知らない内につまんない死に方するなよ。もしそんな事になつたら、君のお墓の前で大笑いしてやるから。」

「ああ。だがお前もそんな死に方してみろ、俺もお前の墓の前で大笑いしてやるよ。・・・もし、日本に帰ってくる事になつたら連絡しろ。お前と再会するまで、番号もメールアドレスも変えずにいてやるよ。」

俺がそう言うと、1度頷いてから家に向かつて歩き始めた。俺もそれを見てから、反対方向にある家に向かつて歩き始める。ふと、俺の名前を呼ぶ声が聞こえて振り返つた。

「篋！さっき言い忘れたが、1年経つて僕が帰つてこなかったとしても、4人が揃うまで探そうとするなよ！探せば、逆に悪い方向に行くからな！」

そう叫んでから手をあげて大きく振り、そのまま走つていった。それが、俺が晴明を見た最後。それから1年半経つた今でも、俺の携帯にあいつから連絡は入っていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7122i/>

4色の欠片

2011年2月4日02時56分発行